

株式会社 M-easy

| | | | |
|-------|---|-------------|-------------|
| 調査団体名 | : 株式会社 M-easy | 団体代表者名 | : 戸田友介 |
| 設立年 | : 2003年 | 対応してくれた人の名前 | : 戸田友介 |
| 団体URL | : http://www.m-easy.co.jp/ | | |
| 活動拠点 | : 愛知県豊田市太田町蟹田6番地 福蔵寺内 | 調査員 | : 眞木宏哉、浜口美穂 |
| 取材日 | : 2013年11月27日 | レポート作成者 | : 浜口美穂 |

活動内容

●活動の経緯

戸田さんが名古屋大学の学生だった当時、大学、学生、経営者の有志が集まってこれからの社会のあり方について議論する「ひと循環型社会支援機構」に参加。これをきっかけに、「これから農業がどんどん衰退していき、自分たちの時代は、安心して食べられるものがなくなってしまうかもしれない！」と思い立ち、若者による農業をベースにした未来づくりをすることを掲げて、同機構の支援も受け、学生を中心に同社を設立した。

2006年から常滑で有機無農薬野菜の生産を開始。縁あって地域のおばちゃんたちの自家用野菜と一緒に名古屋市内を中心にひき売りを行うようになり、2008年に「やさい安心くらぶ」を立ち上げた。これらの事業は2013年10月末に同社から独立。

2009年9月～2011年3月末まで、豊田市旧旭町で「日本再発進！若者よ田舎をめざそうプロジェクト」(若者PJ)を豊田市、東京大学と連携して実施。10名の若者が旭地区に移り住み、安心安全な農業を中心に山里の暮らしを体験。さまざまな価値観の相違などの困難を経て、山里の豊かな自然環境、豊かな人間関係、豊かな暮らしなど「ここには価値あるものがあって、それを表現することが、自分たちの暮らしにつながる」ことに気づいた。

結果、7人が独立して移住。現在は、時につながりながら、福蔵寺の境内でご縁市を開いたり、米や大豆や餅や綿をみんなでつくる「まるっこくらぶ～みんなでつくってみんなでわける野良仕事～」などを実施している。また、都市の人・団体などを受け入れ、山里の体験を提供する講座も実施。2013年3月には「生きるを考える講座」を行った。

キャッチフレーズ

地域に根ざした、はたらきかた・くらしかた・いきかた

会のモットー(何を大切にしているか)

地域で生きていくこと。
生き方、暮らし方を問い続けながら、ライフステージに合わせた活動を行っていく。

設立から現在に至るまで変化したこと

当初はどう稼ぐかということばかり考えていたが、スタッフや地域のじいちゃん・ばあちゃんから、どう暮らしていくかということが一番大切なんだと学んだ。
その後、田舎と街をつなげる中間の役割を担うことを考えて実行しようとしたが、地域のことができないことに気づいた。街に4分の1くらいいるパートナーが必要。同社のスタッフを増やすのではなく、その時々でつながりながら一緒にやれるパートナーをつくっていきたい。田舎体験の企画のときには、地域の人に手伝ってもらうこともある。法人としては小さく、でも、さまざまな人とつながりながら、活動は大きくなっていくことが理想。

連携している団体・専門家・自治体など

旭地区のさまざまな地縁組織や団体、豊田市のさまざまなまちづくり団体、旭木の駅実行委員会(事務局)、とよた都市農山村交流ネットワーク(監事)、東京大学 牧野篤教授、名古屋大学 高野雅夫准教授、NPO法人 樹木環境ネットワーク協会 洪澤寿一氏など多数。

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動(例:小仕事づくり、山村・森林資源活用など)

(同社と個人の動きは明確に分けていないことを前提に)

2013年4月に、豊田市の地域会議制度を利用し「あさひ若者会」を結成(事務局は旭支所)。

●背景:お年寄りと若者の間には気持ちの隔たりや遠慮があるが、若者を巻き込んでいかないと地域づくりはできない。若者も地域のことを真剣に考え、何かやりたいと思っている。

●具体的取り組み: 渋澤寿一氏を招いて講演会、年配者を案内人に村歩き、ワークショップ(何十年か後の旭がどうなっているか、何がしたいかを出し合う)など。

●戸田さんの感想: 地域の若者たちは、「持続可能な社会」という言葉は使わなくても、そのことが腹に落ちているように感じた。

●若者たちが起こした変化: 築羽(つくば)自治区で、笛の吹き手がいなかったから郷社の祭りをやめようという話がお年寄りの中から出たが、若者たちは「いないなら、笛の練習をしよう」と練習会を開き、祭りは継続された。

●今後の可能性: 若者会で「ターン」を呼び込むことができるように。また、「ターン」で入ってきた人と若い衆同士のつながりができるように。

現在直面している課題

課題があるから楽しい。何かやるたびに、多様な人がつながって一緒にやればいい。お寺が本来、住職だけのものではなく、檀家のためや地域の人のために存在するように、同社もその感覚でやれるといいと思っている。

今後やってみたいこと

子どもができてから「教育費はどうするの?」とよく聞かれるが、教育まで外注するのかなと思う。教育費のためにお金を稼ぐなら、その時間をいろいろなことを体験させたり、親の働く姿を見せたりする時間に充てたい。地域が学校になるような、地域の人々が先生になるような仕掛けをつくりたい。

地域の中では、自分のライフステージと合わせてさまざまなことを変化させてやっていけば、自分が納得できる仕事ができる。今は小さな子どもたちが集う企画など。山里では死ぬまでやることがあると思う。

チームオリジナルの質問

<質問内容> 若者PJの他にも、豊森なりわい塾、とよた都市農山村交流ネットワーク、旭木の駅プロジェクト、千年持続学校など、さまざまなプロジェクトが旭地区に集中する理由は何?

<答え>

○豊田市の中でも高齢化率は41%と、一番高い分、危機感がある。

○旭地区は財産区や観光資源など、経済的基盤が弱い。国道もない。他の地域に比べて何も無い分、お金とは関係ないコミュニティが残っている。観光にも毒されず、人がいい。都会の人をつなげるにも、ここなら今までの観光のあり方とは違う、濃密に人と関わりながら気づきを得る新たな観光ができるのではないかな。

○地域をなんとかしたいという数人のキーマンが動いてきたことと、外部からのプロジェクトの刺激がいいご縁で重なりあって、人が人を呼ぶ動きになってきたということだと思う。捨てずにあきらめずに地道に行動し続ければ、いつかかたちになる。

その他、伝えたいこと

○「ターン」で来る人に

一番大切なのは、自分が自分なりに生きていくこと。悩んでいる過程もとても大事。稼ぎに意識がいきがちだが、自分なりの暮らしをつくることを意識して役割を担い、その延長に稼ぎ仕事があると考え、心を平穏に保ちながら住み続けることができると思う。孤立しがちなので、お祭りやお役に積極的に出て、その場を楽しんで!

写真



同社の事務所になっている福蔵寺にて。写真右の右側が戸田さん



ピザ窯が地域のイベントなどで活躍



戸田さん宅で薪割り実演